都市×知

音楽都市のエコシステム

Music City Eco System

ミュージックシティエコシステム

音楽都市インタビュー

High-Life

公益財団法人ハイライフ研究所

インタビュー　北川潤一郎氏

日時：2023 年 9 月 25 日（月）

場所：喫茶店 JK（高槻市）

北川潤一郎（きたがわじゅんいちろう）

高槻ジャズストリート実行委員会立ち上げ人。(有)ジェイケイズ代表取締役。高槻まちづくり株式会社前代表取締役。

1966 年長崎県生。小学生から高槻市民となる。リーガロイヤルホテル勤務の後独立し、高槻郊外（富田）に BAR を開業。現在は 6 店の飲食店を経営する。1999 年に仲間と高槻ジャズストリートを開催。2005 年に高槻まちづくり株式会社を立ち上げ、代表取締役に就任。城北通商店街の理事長、社団法人高槻市観光協会副代表、高槻都市開発株式会社の取締役などを歴任。

【高槻ジャズストリート】

高槻を音楽あふれる楽しい街にしよう！と 1999 年に実行委員会を立ち上げ、それまで賑わいのなかった高槻のゴールデンウイークに街中で無料の音楽フェスを開催（現在 60 会場）。お爺ちゃんお婆ちゃん子どもたち、すべての人に楽しんでもらうため、すべての会場を無料で開催する高槻ジャズストリートは、今や日本最大級の手づくり音楽イベントとなり、2016 年 12 月 15 日に大阪府より「地域観光資源」として認定される。高槻ジャズストリートの最大の特徴は、すべてを学生から高齢者まで、商店主、会社員、主婦などさまざまな人たちによるボランティアで企画・運営していること。ボランティアによる実行委員会の業務は、イベントの発案にはじまり、資金集め、ミュージシャンへの出演交渉など多岐に及ぶ。開催当日は、会場の運営や、交通整理、T シャツの販売、ECO ブースでのゴミの分別まですべてボランティアで行っている。

商店が主体となった無料のジャズフェスは、
行政や警察、市民と密接な関係を丁寧に築きながら続いている

北川：私が 30 歳くらいの頃は、町が一番だめな時だったんです。バブル崩壊のあとの失われた 10 年みたいな……。まちがどんどん衰退していく。商店街はほとんど空き店舗。もうほとんどゴーストタウン。シャッター通りの商店街は犯罪の温床。駅前の商店街は完全に終わってました。でも、駅前で立地もいいので、人が来れば良い商店街になるんじゃないかと、一念発起して商店街に出店（現在の JK カフェ）しました。

1999 年にまちを復活させようという同じ志をもった仲間とともに高槻ジャズストリートを立ち上げました。人の来ないところに人を呼び込もうということなので、なまじ中途半端なことをやってもダメだ！思いっきり凄いことをやろうぜ！どうせなら人が全く来ないゴールデンウイークに人で溢れさせるようなことをしよう！と。絶対無理と言われれば言われるほど、それに反発して、無い知恵を絞って、いろんなことにチャレンジしました。人に来てもらいたい一心で、すべて入場無料のジャズフェスをやろう！と。

無謀にもゲストに日本一のジャズトランペッター日野皓正さんを呼ぼう！お金はどうする？高槻にも大会社はいっぱいある。企業にスポンサーになってもらおう！（ひとつも大会社のスポンサーはとれませんでした）行政も応援してくれる

やろ。助成金ってあるやろ。（甘い！助成金がついたのは３回目で金額は全部で８万円）予算は？300 万円くらいはかかるかな？（めっちゃ適当。実際は５５０万円かかりました）よーし！みんなで集めよう！（まったく集まりませんでした）立ち上げメンバーは 20 人。みんな行政や企業がお金出したりしてくれてなんとかなると思っている。（評論家ばっかり(笑)）

お金集めは大失敗でしたが、実際のイベントは行政や街の人の予想を裏切り、数万人規模の来場がありました（5,000 部用意していた案内パンフレットは初日一瞬で無くなり、急遽政治家事務所の輪転機を借りて白黒増刷。徹夜で２万部つくる）。文字通り街は人で溢れかえりました。運営は酷いことにスタッフ 20 人で 18 会場もやっていたので、もうほとんどパニック状態です。営業している店もほとんどないのでマクドナルドやコンビニですら完売状態。ガードマンもまったく雇ってないし、パンフレットも取り合いだし、飯も食べずに人捌いて怒涛の２日間が終わります。

で、ゴールデンウイークが終わったら、世間は高槻ジャズストリートの話しでもちきり。普段の高槻には来ないテレビや新聞、ラジオの取材があったりで、高槻ではセンセーショナルな事態となったのです。

実際に動いてくれるのは、
名もなき普通の人たち。

なので第２回の開催では実行委員会のメンバーも 20→200 人くらいに増え、みんなやる気まんまん。もう誰にも止められません。しかし内容は、評論家みたいな人が増えるだけで、止められない実行予算は 500 万円を突破。「ああやればいい、こうやればいい」「みんなでお金は集めましょう！」という人が 200 人いても資金集めはやはり私ひとり。結果、完全予算オーバー800 万円ほどの最終出費にたいし、集まったお金は 300 万もなく、超超大赤字。私ひとりぶち切れ状態。

第２回の時は街中の商店はどこも開店していて（人が来ればやる気になる）。「めっちゃ儲かった！よかった！また来年も頼むで！応援するで！」って。運営は超大赤字なのですが、街の人や役所の人、警察や消防署、学校の先生にまで「ジャズスト儲かってるやろ！」と根拠なきご評価。無料の音楽フェスで儲かる訳ありません。

第３回で終わりにする予定だったのですが、街がそれを許しません。当時の高槻市長に、「もう限界です。３回で終わります」って報告しに行ったら、「絶対に辞めたらイカン！これからは行政がバックアップするから安心して続けなさい！」と。はじめて助成金がついた歓喜の瞬間なのですが、実際に次の年に振り込まれた助成金は全部で８万円。偉い人の言うことは、決して信じてはいけないと学ぶ。

ただ、捨てる神あれば拾う神あり。3 回で高槻ジャズストリートを終わらせたくない（普通の）人たちがやっと具体的に行動をとってくれたんです。Ｔシャツの販売や、野外グランドでの飲食販売、パンフレットへの広告、募金などなど……結果はほんの少しの赤字で終わることができ、本当の意味で高槻ジャズストリート実行委員会が動きだしました。実際に動いてくれたのは、政治家でも役人でも商工会議所の偉いさんでもなく、実は名もなき普通の人たち。実行委員会の人の中には、政治や、宗教や、行政や、偉いさんなどの後ろ盾が必要だ！という人もいるけど、そういう人はだいたい口ばっかりで具体的なことは何もしない。実行している人は本当に大変なわけで、いろんなところと協議して、具体的なことを決めていかないといけない。

NPO 法人にするべき？いやうちの実行委員会でも見なし法人？として立派に税金も払っているし、助成金の申請もしています。できるところまで自主自立でがんばっていきたい。いわゆるヒモ付き団体とはなりたくない。だからうちは政治、宗教、人種を超えて活動している。街ってそういうもんですよね。3 人寄れば文殊の知恵。大した人がいなくても 2,000 人のボランティアの力はなによりも強いのです。

運営費用の収支も透明性が大事
有名・無名は関係なく、ミュージシャンが来てくれることに感謝

北川：毎年パンフレットに昨年の収支報告を発表しています。赤字でも黒字でも、ちゃんと収支の報告をすることは大事。ごまさかない。実行委員会の中にはプロの経理している人もいますから、その辺は本当にありがたい。他団体から収支や内訳を聞かれたらほとんど教えてあげるのですが、「逆にそちらはどうですか？」って聞いても答えてくれなかったり。なんでってな？(笑)

外国から参加してくれるミュージシャンも大勢いて、ギャラ扱いの招聘ミュージシャンも、国際交流のノーギャラの方も、プロもアマチュアも、参加してくださるミュージシャンの方には本当に感謝しています。応募が多くて抽選になかなか当たらないって苦情も多く、本当に嬉しい悲鳴。最近は近隣の他市でも開催しているので、そことも連携し、できるだけ多くの人たちが楽しめるイベントを目指しています。

ジャズファンより一般の人が音楽を楽しむイベントでありたいから
無料を貫く

北川：よくジャズマニアの方から、「高槻ジャズストリートはジャズじゃない」とか言われることがあります。会場も小さな箱でないとダメとか、静かに聞けるところでないとダメとか、ジャズフェスといいながらジャズじゃない人が出てるのがおかしい、とか……。もうそんなんどうでもいいじゃないですか。って言いたい。大勢の人がこんなに楽しんでいるのがダメですか？60 以上の会場があるのだから、お好きなミュージシャンのところに行って楽しんでください。それも無料なのだから、無理強いしてないのだし。「嫌なら来なくていい」なんてネットで言っちゃって炎上したこともあります。入場無料だから、子どもも大人も老人もみんな参加できる。幅広い世代の人たちが楽しめるように、いろんな人に出てもらおう！高槻ジャズストリートはそんなイベントなのです。

会場の選定って難しい？人集めも難しい？…いや、実は簡単です。

北川：「うちの店を貸してあげる」「あそこの場所を会場にしたほうがいい」「ここでやってほしい」などなど、実行委員会には多くのリクエストをいただきます。「どうやって会場の選考をしているの？」とも。

はい。簡単です。そこでやりたい人がいれば、そのやりたい人がやったらいいのです。決して実行委員会で「やってあげる」なんてのはありません。神社でやりたければ、神社の方か氏子の人が主体的にやるのであれば、実現するのです。“やってくれ”では実現しません。高槻ジャズストリートはやりたい人が各会場を運営しています。だからみんな評論家ではなくプレイヤーになってがんばるのです。やりたい人がいなければ、その会場がなくなるだけです。

来場者数には意味がない
みんなでつくった成果は風景が表している

北川：イベントをやっている人はやたらと人数にこだわるんですよね。全国の多くのフェスの関係者が根拠なき来場者数争いでおかしくなっているような気がします。ある日本のフェスの来場者が 80 万人だとか 90 万人だとか言っていると

ころがありますが、「ホンマに？」って思いませんか？私も「どんなんかな？」と思って見に行ったりしますが、そこで世界的なフェスの関係者と名刺交換することがあって、そこで目の覚める一言。「80 万人も参加するフェスっておそらく世界一だよね。どんなだろうと見に来たらぜんぜんプーじゃないか。日本人は嘘つきだね」と。これは同じ日本人として、とても恥ずかしかった。私的には、そのフェスもとても楽しい良いイベントだと思う。数さえ盛らなければいいのになぁ。と。きっと広告代理店とかが入っていたりで、それくらいの人数が来てなければスポンサーにもお金出してもらえないのかもしれない。だけど、それって詐欺みたいなもんじゃない？来場者数を盛るのは早くやめたほうがいい。

え？高槻ジャズストリートはどうやって来場者数を数えてるかって？

毎年主催者発表してくださいとはマスコミ各社に言われますが、「正直わかりません」と言ってます。チケットを売っているわけでもないので正確な数字などわからないのです。ただ、そうはいっても実数を意識する唯一のものがあります。パンフレットです。当日、会場の案内や街の案内をするガイドブック（パンフレット）を 8～10 万部製作して無料配布しています。これはもう大変です。64 ページくらいある冊子なので一冊作るのに 50 円くらいはかかります。だから出来るだけ実数に近い数しかつくりたくない（めちゃくちゃお金かかる）のです。1 万人の来場者に 10 万部とかつくれないのです。ちなみに 80 万人とか 90 万人とか謳っているフェスの人に「パンフレット何部つくってるの？」って聞いてみたら、1 万 5 千部でした。絶対 1 万 5 千人以上来ているフェスですが 80 万人は……ねえ。

ねぶた祭りや阿波踊りなど、伝統的な日本のお祭りは素晴らしいですね。そのクラスになると、来場者数なんて盛らなくても本当に素晴らしいお祭りで、たくさんの人で賑わいます。全国のジャズフェス、ミュージックフェスも早くその域になってほしいもんです。

素人でいい。世代もバラバラでいい。いろんな人がいていい。
自然に集まってきた「やる気のある」人で声を掛け合ってやることが重要

北川：コアメンバーはいつも増減してます。来たり来なかったりするんで。どっかのお爺ちゃんとか、主婦の人とか、学生とか、みんな一般の人たちなんですよ。僕は高槻ジャズストリートは素人がつくっているからいいような気がするんです。プロデューサーとか、プロの企画屋なんて、実はあまり必要ない。知恵を絞っていろんなことを素人ながらに解決していくからこそ高槻ジャズストリートの良さがある。

自分からやりたいと思ってやることがボランティア。やらされることはボランティアではない。
だから本当のボランティア組織は強い。

北川：ニューヨークのハーレムに行った時、黒人の貧しい人が麻薬で捕まったりして子どもが親戚の家に預けられた時にドメスティックバイオレンスにあったり、子どもにドラッグを売るのはやめようとか、黒人自身で黒人を守ろうという活動がありました。知人に紹介され、そこのお手伝いに行った時、切手を山ほど貼らされ、“つまんない、面倒くさいなぁ”と顔に出てたんでしょうね、周りの人に「なんなのあなた！来たくなれれば来なくていい」と怒られ、「ボランティアで来てあげてるのに」みたいなこと言って反抗したら、「そんなんボランティアじゃない。自分がやりたいと思って来るのじゃなければボランティアじゃない！」。なるほど、とボランティアの本当の意味をそこで初めて理解しました。そうやって皆で助け合いをやっているんだ、と。

以前うちの町は、お祭りが終わった会場にはごみやたばこの吸い殻が山ほどあり、グランドはまるでゴミ捨て場のようでした。「ボランティアで小学校のグランドを綺麗にしましょう！」と偉い人がいつも言うてるけれども、いかんせん、いやいや

のボランティアスタッフだけではなかなか掃除もはかどらない。ならば業者に頼もうと多額のお金を支払って清掃してもらう。毎年毎年同じことの繰り返しで進歩がない。どうせ業者が清掃するのだからと、大人ならずも子どもたちまでゴミをポイ捨て。誰も注意すらしない……。それではいけないと意思のある人たちが「それをどうやったら解決できる？」と議論する。「こうすればいいのじゃないか？ああやってはどうだろう！」と。そして実行する。これこそボランティア。

それで結局みんなでゴミの分別ステーションをつくり、ルールをつくり、徹底的にゴミ分別に挑む。そして祭り後の小学校のグランドにはゴミひとつ落ちてないという驚きの結果に！大成功だった！と携わった人は感動する。今やゴミ分別ステーションは「エコステーション」と名前を変え、高槻の祭りでは当然のごとくゴミの分別をしています。子どもたちにも、箸は炭にしてリサイクルする、アルミ缶は、ビンは……と分別後の処理方法も教える。子どもは素直に分別してくれる。その活動もすでに 20 年を過ぎ、その子どもたちも親となり、子どもを連れて祭りに来る。その子どもは誰から教わることもなく、ごみの分別をしている。以前のように、食べかすゴミをその場にポイなんてこと今では絶対にないんです。

他のイベントにも派生して広がる

北川：ミーティングは週一でやっています。ミーティングという名の飲み会。大概喧嘩するんです。「もう絶対に来へんからな！」「おう！二度と来るな」……とか言っても、そのうちまた来てる(笑)。毎回来るやつはよっぽどおかしいやつなんですよ。

今度、秋に「食の文化祭」ってのをやるんですけど、これは地元の飲食店を盛り上げるお祭りで「食の文化祭実行委員会」って名前でやっていますが、やり方はジャズストとほぼ同じ。若手のロックフェス「高槻魂」、芸術家が中心の埴輪フェス「はにこっと」、土建屋のおっさんたちが立ち上げた子どもたちのための「安満遺跡青銅祭」、名前やメンバーが違えども、やっていることはジャズストとほぼ同じ。機材もジャズストから無償提供しています。

実行委員会はフラットな関係。
みな「自分がリーダー」という自負を持つ。

北川：ジャズストの代表（リーダー）を僕たちはチェアマンと呼んでいるのですが、初代は僕で、現在は 5 代目です。チェアマンが 5 回変わっているから、転換期は 5 回くらいありました。でもそんな悪い転換ではないんで、やっぱりどんどん変えていかなと思ってます。やる気のある、新しい人たちが出てくる。その人たちがやる気を持ってくるわけだから、その気持ちを削がないようにしないといけない。

よく、後継者がいないとか年寄りが言いますが、後継者なんていくらでもいます。やりたい奴にやらせればいいんです。小さなことを責任を持ってどんどんやらせる。経験を積ませないとアカンのです。「高槻魂」（ロックフェス）も始まった頃から 10 年が経ち、めちゃめちゃ良いイベントになりました。なんでもアカンアカンで潰したらいかんのです。

高槻ジャズストリートでも 20 年ほど前、高槻市バスを借りて、会場をまわるシャトルバスにしよう。バスの中でも演奏してたら面白いんじゃない？と、当時の高校生ボランティアからの提案がありました。ボランティア爺さんたちは「そんなん無理やろ」「市バスがそんなんやらしてくれん」「安全が・・・」「既定の路線しか走れない……」と適当なことばっかり言って潰そうとするんですよ。同じ実行委員会の中での衝突です。

実際に高校生たちを市バスに話を持っていったり、行政とも何回も交渉もした結果、実現することができました。高校生の夢がひとつ実現できたわけです。この取り組みは大阪府からも表彰されました。表彰式では発案者の子が「これは私のチカラじゃなく、みんなのチカラ。一生忘れません」と……それを聞いた一同は号泣したのでした。

観衆では成功体験はないけど、
つくり手、プレイヤーになれば、いろんな成功、失敗体験がある。

北川：ちっちゃな失敗や、成功を重ねていかないとアカンと思うのです。実行委員会の人ってそれを体験しています。ゴミゼロみたいなことにチャレンジして、それが上手くいった時、それは実はすごいことなんです。理屈でなく、実行して、結果をだして、そこに感動がある。その感動を知っている人は、それはもう凄いリーダーとなるわけです。

フリーマーケットの説明会で、出展者のおばちゃんたちが、出展者の駐車場はないのはおかしいだの、ルールが厳しいだの、ボランティアに搬入などを手伝ってほしいなどなど、わがまま三昧の意見ばかりで、「おばちゃんたちは運営側の立場やろ。お客さんじゃないんやから」って言うたら、「1,000 円も払っているんやからお客さんやろ」「1,000 円で偉そうなこというな！」って言い合いになりました（笑）。フリマ出店者用の駐車場なんて用意してない→主催者としておかしいやろ→搬入の時だけ車の捌き場をつくる。ただし、人がいない朝 5 時から 5 時半までの間に搬入してください→あほか！となるが、やはりそれ以外の方法はなく、その通りにしたらすべてがうまくいった。実際にやってみれば結果は出る。良い意見があればみんなで議論してよりよくするだけ。

中途半端だと失敗する

北川：実行委員会のミーティングでは、財政難だし、イベントを有料にするべき！との意見も多いんですね。それはそれで良い意見ではありますが、それでは今までの高槻ジャズストリートのジャズスト魂みたいなポリシーが失せる。お爺ちゃんお婆ちゃんも、子どもたちも、お金ある人もない人もすべての人が来れる高槻ジャズストリートにしよう！というのがポリシーだ。「500 円でも 1,000 円でもとったらいいのとちゃう？」という意見には大反発する。

良い例があります。同じくうちの街を代表する「高槻まつり」（行政主導）で、子どもたちのダンス披露部門を、前年までの小学校のグランドから、劇場に有料（500 円）で開催することになった。子どもたちが半年ほど練習に練習を重ね、必死で練習してつくり上げてきたダンス。以前、小学校のグランドでやっていた時（無料）は人がいっぱいのところでのダンスのお披露目はとても良い取り組みだった。しかし、財政難？安全対策？主催者の適当な思いつき？による場所の変更と有料化は散々だった。1,500 人ほど入る劇場に、実際に（500 円を払って）見に行く人は、30 人ほどの父兄たちだけ。ガラガラ。かわいそう。高槻祭りの実行予算なんて数千万円もかけてるのに、そこだけ有料って……そんな中途半端なこと……わかりやすい失敗例です。

行政はサポートの仕方を考えてほしい。
デトロイト市は行政職員がボランティアとして参加している

北川：高槻市はお金が無いと言っても、結局違うところにはお金をかけているわけだから、分配の形というか、どこが重要かを考えてほしい。

デトロイトジャズフェスティバルはもともとデトロイト市の主催でしたが、財政難により市が撤退することになった時、ニューヨークのアパレルメーカー「カーハート」が 18 億円を寄付してイベントを継続させました。今は（高槻ジャズストリートと同じく）実行委員会として民間で運営されています。

民間運営になったからといって、行政は何もしていないことはなく、安全を確保するために警察官を増員して、徹底

的に会場の警備をやったり、行政職員がいろんなところで案内業務などをこなしていて、お金じゃないところで十分な役目を果たしています。

まちを愛していて「なにかやろうぜ」って人たちなら、ジャズに詳しくなくとも同じ仲間。
高槻ジャズストリートは、ジャズ愛好家のイベントではなく、市民のイベントなのです。

北川：各地から、ジャズフェスをやりたいという人からの相談がいっぱい来ます。東京すみだジャズや大津ジャズ、東近江、茨木、富田、亀岡など、当初は音響設備やテーブル、椅子、テントなど、イベントに必要な機材を高槻ジャズから提供していました。最初から、すべての資材を用意するのは結構なお金もかかるし、幸か不幸か、うち（高槻ジャズ）には長年少しづつ買い足してきた機材もあるし年に何回かしか使わないものだから、同じ日でなければ無料で貸してあげようと（現在はすべて自前の機材を持っておられます）。

ミュージシャンもどうやって招聘するの？→連絡先を教えるわ。非常に簡単。ミュージシャンにとっても仕事が増えるからいいと思います（ただし、ギャラなどの条件交渉は各々でやってくださいと言います）。

東京すみだジャズの立ち上げをした二人のうちの一人が高槻出身の魚河岸で働くやる気満々の男ですが、ジャズのことはわからんが、高槻ジャズのようなイベントをやりたい、教えてくださいとやってきた。私からしたら、東京みたいな人の多いところで、なぜ町おこしイベントなんてやりたいのか、さっぱり理解できんかった。彼らは、お祭りがないからコミュニティが無くなっている。高槻のようにコミュニティをつくりたいのだ、と。ジャズのことはわからんが、高槻ジャズのようなイベント＝お祭りをやりたい。人も集める。お金も集める。がんばる。と。

ジャズ界のプロではなく、イベント屋でもなく、行政マンでもなく、魚河岸の男。10 年以上経った現在も、彼は元気に活躍している。まさしく水を得た魚。やる気さえあれば、プロでなくとも、誰だってイベントはできます。市民イベントであればノウハウは無料でお教えします。

海外でも同じようなバカな人たちがいる

北川：今年は、韓国（天安と加平）、フランス（サンマロー）、アメリカ（デトロイト）と、お互いのイベントで人と音楽の交流をしましょうということになりました。「デトロイトジャズフェス」は世界でも有数の音楽イベントですが、会場の入場料は無料なので、老若男女問わず楽しめる凄いイベントです。さすがジャズの本場アメリカ。クオリティも、ボランティアのプライドも、オーディエンスの楽しみ方も、どれもこれもすごい。フランスのサンマローは田舎の港町で、芸術家っぽいご夫妻が、街の仲間をあつめて、イベントにより自分たちの街を活性化させている。

韓国の加平で開催される「JARASUM 国際ジャズフェス」は北朝鮮の近くの片田舎に数十万人ものオーディエンスを集める（おそらくアジアで一番大きな）ジャズフェス。街あげて、というか国あげて、このイベントを育てています。ヨーロッパなどからの欧米人の来訪者も多く、過疎の町はこのジャズフェスで息を吹き返したんですね。もうひとつ韓国の「天安（チョナン）ジャズ」。まだ新しいイベントですが、高槻ジャズと同じコンセプトで、市民による町おこしです。

何年も諸外国のジャズフェス関係者とお付き合いさせていただいていますが、共通しているのは、みなさんやる気のある素人で、街を愛するバカな人、だってことですね。

まちの人に遊びに来てください！（ゲスト）じゃない。
まちの人は、ボランティア（ホスト）してください、なんです。

北川：総務所の人が、うちのイベントに高槻の住人が何人くらい来ているのかという統計？をとってくれたことがありますが、なんと 3 割もいなかったとのこと。7 割の人が他所から来ている。だから、まちの人にはゲストじゃなくてホストになって他からくる人をもてなしてください、ってことなんですよ。観光ってそういうもんじゃないですか。観光地の温泉旅館に地元の人が宿泊するってことないですよね。その街のことが好きになるかどうかはその街のホスピタリティ次第です。

一年に二日間だけの高槻ジャズストリートで、まちは変わるのか？
はい。確実にかわります。

北川：高槻の街が好きになってくれた商売人が高槻で商売をしたいとおっしゃる。高槻ジャズストリートを始めてから 27 年で街の商店の数は 130 軒から 1,300 軒と 10 倍になっています。

よく冗談で「高槻ジャズに騙されたなぁ」と新規でご商売をされた方が言われます。北摂で有数のテナント料が高い地域になったのですから、なにもせずこのまますたる訳にはいきません。だからがんばるのです。がんばるエネルギーが大事なんです。ロックがどうとかハロウィンがどうとか、大阪の大都会にいかなくても、このまちで楽しめるってことがすごく大事なんです。

世の中には「名前は知っている」が行ったことのない街って山ほどありますよね。だから 1 回でも街に来てもらえるのは、すごいチャンスなわけです。駅前の廃れたシャッター通り商店街から奇跡を復活をとげるのに、何もせずになれるわけはない。「イベントなんてやっても・・・」「ゴールデンウイークなんて人来るわけない・・・」「ジャズ？なんでやねん？演歌なら歌ったるわ」「やっても無駄」「迷惑」……などなど、多くのネガティブな地元の意見を跳ね除け、よそ者、若者、馬鹿者、な私がやったことは、ただただ「やった」ことだけ。

近所に神社があり、ジャズストを始める前は地域と一緒に廃れていて、人もなかなか寄らないところでした。商店街でお掃除に行った時、倉庫に山車を発見しました。以前はお祭りをして街中で山車を練り回していたそうです。なぜお祭りはなくなった？「山車は出すことないの？」って聞いたら、「人がおらん」とのこと。であれば、人集めてお祭りを復活させよう！山車に子どもを乗せて街中練り歩こうと声をあげたら、「よそ者はお宮さん（山車）に触るな」「勝手なことするな」と地元のおじさんたちに散々怒られる始末。実際、街のコミュニティを無くしたのはこのおじさんたちです。「忙しい」「面倒くさい」ことが嫌な、なんでも否定するおじさんたちは、街の偉いさん？たち。ビルを持っていたり、駐車場を持っていたり、要は代々の地主さんの末裔。こんなおっさんたちと心中するのは嫌だ！と、神社の宮司を説得して秋祭りをしよう！と若いもんで声をあげました。山車の修理からはじまり、人集め、金集め、地主さんからは嫌われましたが、多くの人から指示を得て今も神社の秋祭りは継続してます（この神社は高槻ジャズストリートの人気会場になってます）。

暴力団追放運動や、４５年もほっからかしだった道路の舗装。人が歩ける街にしようと交通社会実験をしたり、商店街の理事会を全員若手にするなど、思い切った改革で今も独走中です。なにが良くて、なにが悪いか、いまだになんにもわかりません。ただ、やることやらないと、結果がどうだったかわからない。きっと後から後悔する。

高槻ジャズストリートで街は変わったか、って？はい。確実に変わりました。知らんけど。

「都市×知」

音楽都市のエコシステム

Music City Eco-system

＜研究メンバー＞

服部 圭郎　　龍谷大学政策学部 教授

紫牟田 伸子　　株式会社Future research Institute 代表

水本 宏毅　　株式会社読売広告社 都市生活研究所 エグゼクティブリサーチディレクター

榎本 元　　公益財団法人ハイライフ研究所 主席研究員

＜表紙デザイン＞

伊藤 愛　　株式会社ソフトマシーン

発行　2024年7月

発行所 公益財団法人ハイライフ研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座1－8－14 銀座YOMIKOビル8F

TEL03-3563-8686（代表）Fax03-3563-7987

https://www.hilife.or.jp/

©公益財団法人 ハイライフ研究所

©株式会社Future research Institute